

*** ノブレス オブリージュ

往年のラグーマン清宮克幸氏の講演を聞く機会があった。

登壇した克幸氏は、舞台上のためか往年の NO.8 の巨躯がややスマートになったように見えたが、50 代になっても、好漢ぶりは変わっていない様子であった。現在売り出し中のご長男、日本ハムファイターズ幸太郎選手のふっくらした風貌は父親そっくりであり、そのことに触れたときの氏の表情は緩みっぱなし、父親のそれであった。

さて、氏のラグビー人生は高校入学とともに始まる。3 年時には花園の全国大会に出場、高校日本代表にも選ばれる。早稲田大学では 1 年からレギュラー、翌年日本選手権優勝に貢献、4 年時には主将として大学選手権優勝に導いた。1990 年、サントリー入社後も営業活動の傍らラグビー部主将としても活躍し、2001 年現役引退まで常に中心選手としてチームを導き続けた。そして、指導者としても力量を発揮することになる。早稲田大学ラグビー蹴球部監督に就任するや、5 年連続で関東大学対抗戦全勝優勝、大学選手権も 3 度制覇するなど早稲田ラグビー復活の原動力になった。2006 年サントリーラグビー部の監督に就任すると、翌年チーム初のトップリーグチャンピオンへ導き、さらに、2011 年には、リーマンショックの影響で強化を縮小し、リストラ中であったヤマハ発動機の監督に就任、4 年で日本一となるなど、常に覇権を争うチームに育て上げてきた。

このような輝かしい戦績の持ち主から「勝つためのチームマネジメント」をテーマに、その哲学や体験が披露されることを期待して、多くの聴衆が集まった。一般の社会人のもとより、幸太郎選手のファンか若い女性も目立ち、留学生を含むラグビー少年の一同も会場の一角を占めた。

まず冒頭で、ラグビーを、「自ら考え、自分のすべき役割を見つけ、実行するスポーツ」とであると定義付けた。通常のチームスポーツが監督の指示に従ってチームプレイを進めるものであるのに対し、ラグビーは試合中にグラウンド上で、場面に応じて瞬時に選手自身が判断し、個々の役割を果たすことが求められるのである。そういえば、前回のワールドカップで、強豪南アフリカに逆転勝ちした日本が演じたドラマは、ノーサイド直前の最終プレイの選択にあった。ペナルティーキックが決まれば同点引き分けのところを、逆転トライに賭けたグラウンド上の選手たちの勇気と決断の結果であったことは記憶に新しい。そして、氏は、このような意思決定・行動過程をもたらすラグビー精神は、普段のビジネスに通じるものであると示唆したのであり、自身の営業経験とも重ね合わせてのことであろう。さらに、試合に臨む姿勢として、どのスポーツも必ず勝つ心構えで励むことに変わりはないが、野球は負けても 2 勝 1 敗なら十分優勝ラインに達する一方、ラグビーは負けてはいられない、常に勝つことが求められる。そのための役割分担と責任感がチームには求められるのである。

そして、氏は、これまでの体験から試合に勝っていくには、「熱・言葉の力・独自性」が必要なこととまとめた。常勝チームをつくり、育ててきた過程には、選手個々の資質よりも、チームとしての勝ちたいという“熱”＝連帯感・一体感、それを浸透させる勇気ある

“言葉の力”、勝つために必要なスキル＝他にない“独自性”を持つことが不可欠であったし、そのことを徹底して追求してきた結果が勝利をもたらしてきたのであろう。

その氏も 18-19 年シーズンを最後に監督を退任している。これからの人生設計の一端、決意の表れでもあろうか、後半はnoblesse oblige オブリージュに話題を移した。

noblesse oblige (noblesse oblige)とは、フランス語の「貴族」と「義務を負わせる」を合成した言葉で、一般的に財産、権力、社会的地位の保持には義務が伴うことを指している。貴族にはさまざまな特権が与えられていたが、いざ戦争となったら率先して最前線に立って命懸けで戦う義務を課していたことに由来するもので、身分の高い者はそれに応じて果たさなければならない社会的責任と義務があるという、欧米社会における基本的な道徳観である。

2003 年、イラク大使館参事官時代にテロにより亡くなった奥克彦氏の遺志を継いで、「奥・井ノ上イラクこども基金」の創設に奔走した、早大監督時代の氏の話は感動的であった。テロの危険が予知されるなか、「今帰国したら、イラクの子供たちのために何もしないことになる。」と、身の危険を省みずイラクに残った奥氏もラグーマンであった。

noblesse oblige もまたラグビー精神であろう。「いま自分に何ができるか、自分にできることをする」という生き方をしていくことが、立場を得たものの責任であるという思いが伝わってくる、大変印象深い話であった。

さてさて、今秋はラグビー・ワールドカップ 2019 が日本で開催され、また、先般、氏は日本ラグビー協会副会長就任が報じられている。益々の活躍を期待する次第である。

興味深い講演を聴いて晴れ晴れとした気分で帰宅すると、同時進行していたプロ野球交流戦では、幸太郎選手は三振・・・という結果であったが、ファイターズも、南海以来のファンであるホークスも勝利しており、気分良く週末のお休みとなったのである。

20190604 MS 生

同年 9 月 20 日にはじまったラグビー・ワールドカップ (1987 年から 4 年ごとに開催) は、戦前の予想・期待をはるかに上回る日本チームの破竹の勢いに乗って、空前の盛り上がりを見せた。予選リーグの一戦一戦に国中が固唾を呑んでの応援で後押しし、はじめての決勝トーナメント (ベスト 8) 進出に沸いた。

国中に俄かラグビーファンが溢れ、11 月 2 日大成功裏に大会は終了した。

多くの国々から応援の観衆が訪れ、総観客数 170 万人が飲んだビールの売り上げもさぞや上がったことだろう。

WC イングランド対トンガ (札幌ドーム)

